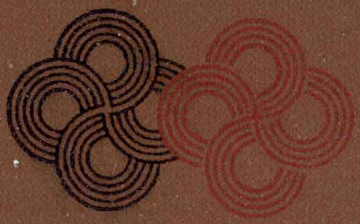

翁草1（巻一～巻三十五）＝神沢杜口

19

日本随筆大成

第三期

吉川弘文館

日本随筆大成　第三期第十一巻
昭和六年二月五日発行
編纂者　日本随筆大成編輯部
代表　早川純三郎
発行者　桜井庄吉
発行所　日本随筆大成刊行会

日本随筆大成
〈第三期〉19
昭和五十三年二月十五日　印刷
昭和五十三年二月二十八日　発行
編　者　日本随筆大成編輯部
発行者　吉川圭三
発行所　株式会社　吉川弘文館
〒113　東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三―九一五一〈代表〉
振替口座東京〇―二四四番
製　作＝株式会社　たんちょう社

解　題

翁草　二百巻

神沢杜口（かんざわとこう）　著

第十九巻～第二十四巻は、翁草二百巻を分冊して刊行する。その編成は、第十九巻　巻一～巻三十五、第二十巻　巻三十六～巻六十三、第二十一巻　巻六十四～巻百二、第二十二巻　巻百三～巻百三十二、第二十三巻　巻百三十三～巻百六十六、第二十四巻　巻百六十七～巻二百、以上の如くである。

本書はもと京都町奉行の与力であった神沢杜口の編述にかかる著書であるが、成書をそのままに写しているものが多く、随筆というよりも叢書というに近いが、それら筆写の書にも、「三王外記」その他、自己の評語をも附記していて、己の是とするところを直言して憚らぬ強い態度に敬意が表せられる。また純然たる随筆の部分は行文が質実で、その裡におのずからなる滋味の存するものがあって、杜口の人となりが想察せられて来る。明和九年六十三の歳の自序があるが、初めの百巻はその明和年中になり、その後更に百巻を加えたところ、天明八年正月の京都の大火にその半を焼失したのを再び編述して、全二百巻の成ったのは、寛政三年その八十二の歳だった。

今回の重刊にあたっては、概ね旧大成本を踏襲することとなったが、その旧大成本は、池辺義象校訂本によったのであった。すなわち同氏校訂本は、「普く世にありふれたるもの」として、以下の諸書を省いている。赤穂義人録（巻十五～巻十七）、国朝旧章録（巻十八～巻二十四）、いろは弁（巻四十九）、同文通考（巻五十～巻五十三）、万国夢物語（巻七十九～巻八十二）、当用書札曾我家書（巻

八十五～巻八十八）、春台独語（巻九十三～巻九十四）、新安手簡（巻百十一～巻百十四）、鳩巣小説（巻百二十三～巻百二十四）、求言録（巻百二十七所収）、春画（巻百四十三）、年山紀聞（巻百六十所収）。右は今回も省略に従うこと同前であるが、巻三十三の武田勝頼の条に附する貼紙、並びに巻三十五の天竺徳兵衛事の条を、内閣文庫蔵二百二十巻本によって新たに加えた。また明和九年の自序、安永五年の那波魯堂の漢文序の他に、伴蒿蹊（寛政三年春）、西山拙斎（同四年）、同塵館主人瓘（天明八年正月）、僧蝶夢の序をも、諸本を参看して翻刻した。右の序文は、明治年間に刊行せられた存採叢書所収翁草にみられるところであるが、宗政五十緒氏は「国文学論叢」第九輯において、写字台文庫蔵本によって紹介している。

翁草の版本には、天明四年、嘉永三年、同四年版の他に、刊年不明のものが知られているが、天明四年版は、すなわち杜口七十五の歳のことであり、すでに生存中に抄出本が出来ていたことに興味が深い。嘉永版は池田東籬亭の校訂になるもので、初帙とあるところから更に続けて刊行する予定だったのであったろう。また其蜩庵随筆と呼ばれる刊年不明の版本があるのであるが、これは天明四年版と内容が同一である。なお同書は随筆大観第二に収録されている。池田東籬亭の嘉永版は、続帝国文庫五十篇、日本随筆全集第十五巻にそれぞれ活字化されている。

翁草にはなお異本翁草と称せられるものがあるが、それは一部分随筆大成本等と重複するところはあっても、内容の相違が甚だしい。その異本をはじめ諸写本の委細については、未だ調査中のこともあるので、他日を期する（第二十四巻解題補）。

著者の神沢杜口は、名を貞幹、また俳諧に遊んで其蜩庵とも号する。其蜩はすなわち「その日暮し」の宛字である。本姓入江氏。十一歳の時神沢弥十郎貞宜の養子となり、後その京都町奉行与力の職を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ついだ。幼より俳諧を好み（「其蜩庵杜口発句藪」享保五子年歳旦十一の歳の句に、万歳の素襖着すも都風、がある）、初め晩山門に学び、のち淡々に随つて、京都を中心とする俳壇の人々とも広く交った。専ら読書を好み、早く隠遁して著述に従事した。

辞世とは即ちまよひたゞ死なん

の句を詠じて、寛政七年二月十一日八十六歳で歿した。墓は京都出水通七本松の慈眼寺にある。著作は、翁草につぐ塵泥五十巻があり、春興、ふたりつれの句集がある。なお「懸葵」昭和八年四月から六回に亙って赤山孤山氏は、杜口門人牛行の集になる其蜩庵杜口発句藪を紹介し、簡単な年譜を附している。同書は、杜口十一歳の享保五年の句にはじまり、天明三年の七十四の歳の句に終る七百余句を収める。

以下翁草に関する諸家の文を紹介して参考に供する。

蝶夢和尚文集に次の一文がある。

翁草称美の辞　　神沢杜口老人纂

世をのがれすむ身は、耳こそうとくてありたけれ、世のよしなしごと聞かじがためにて、ものゝ幸なるものをや、爰にこの神沢何がしこそ、其人にておはすれ、耳はかたのごとくうとければ、世のものおとしらで、ひたぶる机にむかひて、むかし今の事思ひいでゝ、目さへあきらかにおはせば、筆をのみとりて此年ごろ書すさみ給ふける著述の書百五十巻、外に七十余巻あり、題して翁草といふ、文に心とめて猶もさかゆく八十のこの春よりは、

書そめて百千につゞけ翁草

方違へとて二日はわが岡崎の菴にやどり給ふ、また節分の夜は、七条わたりの易得亭に行て、とまらんとのあらましなるを、

行さきに蓬萊山や松のうち

杜口編著塵泥（国会図書館所蔵）に附する校訂者橘南谿の序は、同人の著作北窓瑣談後編巻之一にも収めるものであるが、辞句に少異動がある。この文は諸家の随筆類にその一部分が多く引用せられており、永井荷風は、喜多村筠庭の筠庭雑録中に抄出される文を読んで、その日録昭和十六年六月十五日に、「今日以後余の思ふところは寸毫も憚り恐るゝ事なく之を筆にして後世史家の資料に供すべし」と書している。

序

翁草のふみや、京師の士神沢の某致仕の後、杜口と名乗りて市中に住ける時の作なり、其かず二百巻成就して後、近年の奇事亦多ければ筆に留め難しとて塵泥となむ名付て五十巻を著しおけり、今此書なり、皆諸家の秘書実録にして、上は王侯より下は庶民に臻るまで高論雑事を録せり。此人齢八十四歳の時、予始めて識る人になりて、折節尋ねて隔意なく物語せり、性温厚且柔和の質にて、隠居せし後は世事を経営する事露斗もなく、実に世外の真隠なり、老後は耳聾て物語は皆筆譚なりける、予或日彼庵室に尋ねて、例の筆談の中に、予が著述の中にも遠慮なき事多し、依て世間広くは出し難き事ありなど云けるに、翁色を正しくして、足下はいまだ壮年の事なれば尚此後も著書多かるべし、平常の事は随分柔和にて遠慮がちなるがよし、只筆を執りては聊も遠慮の心を起すべからず。夫世間を憚りては実を失ふ事多し、翁が著す書には、天子将軍の御事にても聊遠慮する事なく、実記の儘直筆に

誌す。是まで親族朋友の徒、毎度諫めていかに写書なればとて、亦世間に出まじき物でもなし、いづれか忌諱の事にか触て罪を得まじきにもあらず、高貴の御事は遠慮し給ふべし、と謂へど、翁この一事はたとへ親族朋友の諫には従ひ難しと申切て胆然たり、翁が実記後世に伝ふべく思へば、善悪とも侵せしは其人の過なれば、仮令高貴の御方にても少しも枉て実を覆ふ事を欲せず、今此実録の事に付て罪を得ば、八十老翁の白髪首刎らるゝとも恨なし、筆記の事に付て初めより一命を差出して録する事なり、世に高貴の人の悪は善に取なし、賤き人の善事は称美する人稀にして、遂には世に埋るゝ事嗚呼歎息すべき臻りなりけり、足下もくれ〴〵筆を執りては啻何事も遠慮し給ふべからず、と繰返し〳〵云はれし言の葉、誠に翁が志操毅然として奪ふべきにあらず、実に古の良士の風有る人なりきと再び考訂して蔵むる者は、梅華僊史の幽窓主人瑣月の晌にしるす。

寛政庚申如月

橘南谿子述

また平塚瓢斎の目埃集第二十四冊には次の如くある（森銑三編「近世人物研究資料綜覧」所引）。

杜口老人の翁草を世に大著述の如く心得、その序文にも事々しく是を賞誉したれど、実に老人の筆を揮はれしは、享保年間洛俳諧之噂、天明大火之説、小堀和泉守乱行一件八幡妻敵打、石黒三十郎が事あだし草、ちり塚の塵等数条に過ぎず。三王外記、大野片桐評、四十六士論之類、自註を加へられしは尤確論ともみへたれば、已上を翁草正編と称し、好事の人は謄写珍蔵して老人の真面目をも見るべし、その余武野燭談、厳秘録、白石五事略、鳩巣小説、国朝旧章録、当用書冊、当代奇覧、元宝荘子、名君享保録、長崎実記、万国夢物語、義人録、又霊元帝御幸之宸記、飛鳥井雅章卿吉野紀行の類は、世に流布する書籍の抜写なれば、是を翁草の外編と号し、何れも本書あれば読み書の労を省くと

も可なり。近頃右翁草二百巻を丸写しにして、悉く老人の著述と心得弄ぶもの有。無益の書あれば因て記し置くのみ。

序でに杜口七十の歳の古稀の祝の記念として、杜口、練石、丈石、蕪村等の百韻と、杜口蕪村の両吟歌仙を一巻の書とした「ふたりつれ」の杜口の自序を掲げて置こう。

自序

日ぐらしの空だのめ、きのふとなくけふとなく、すゞろにおもほえども、国に杖つく齒とはなれりける、さるを人々とりはやして祝ひの吟をたぶ、をよそ年をことぶくはやごとなき御身はさら也、なべての人にもいみじき聞えなどあらんは、猶行末ひさにとも惜みなん。をのれがごとき頑なゝるひが翁にはにげなき事なれば、其をくられし一筆を櫃中に蔵めて爰に漏しつ。たゞに言なし草の深き道をふたりうらなく分行こそ、こよなき祝ぎなれと、それかれの友どちをそゝのかして、両唫を催すに何くれと歌仙のつもれる事、いその上ふたつみつとかずまへて、ことばの林生茂みぬるをかいやらんもむ□也。板につけてよと友人のすゝめにしたがひて剞劂氏に附す。はた此一帖の名をさらに需めんも六かしければ、有のまゝにふたり連と呼んもむべならんかし。

安永八のとし　　其蜩老人漫書

最後に森鷗外が翁草巻百十七所収の流人の話をもとに「高瀬舟」の名篇を為していることをも附記して置こう。

（小出）

目　次

翁　草（巻之一～巻之三十五）……一

（解題　北川博邦　小出昌洋）

翁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

目次

巻之一

故諺記
板倉周防守牛込時楽軒を喩す　二七
板倉伊賀守の智徳　二八
本多正信鷹匠たりし間の話及びその評論　二九
本多正信加増を辞す　三〇
本多正信嫡子を戒む　三一
酒井雅楽頭の諷諫　三一
土井利勝松平信綱を諫む　三三
土井利勝の倹徳　三三
安藤帯刀人を使ふ法　三三
安藤帯刀同苗右京亮を訪ふ　三四
青山伯耆守の諫言　三四
井伊掃部頭の直言　三五
井伊掃部頭の智勇　三六
板倉周防守職責を重んず　三七
板倉周防守の証文　三八
板倉伊賀守周防守に竹笠を贈る　三八
阿部豊後守御湯殿坊主をかこふ　三九
阿部豊後守鶉を放つ　三九
阿部豊後守松平伊豆守に直言す　三九
板倉内膳正の寛量　四〇
井上河内守の胆略　四〇
井上河内守の即智　四二
井上河内守の仁慈　四三
井上河内守猶子を喩す　四三
井上河内守御城より徒歩にて帰る　四三
井上河内守旱魃を見廻はる　四四
久世大和守御膳の虫を食ふ　四四

巻之二

古老燭談

土井大炊頭江戸城等普請に付ての話　四七
大久保彦左衛門井伊直政を喩す　四八
江州一つ松の小祠に付板倉周防守の裁断　四九
井上河内守百姓の律義を賞す　四九
酒井讃岐守若狭入国の時百姓の言を聴く　五〇
松平伊豆守大名旗本の説　五〇
松平伊豆守の頓智　五一
本多佐渡守の諫言　五一
松平伊豆守の即智　五二
松平伊豆守法華僧侶を服せしむ　五二
安藤対馬守酒井讃岐守に我が子の事を頼む　五二
由井正雪叛の事により酒井讃岐守紀州家に赴く　五三
酒井修理大夫の寛量　五四
南都宝蔵院弟子鎗仕相の事　五四
宝蔵院弟子中村市右衛門江戸に出でゝ鎗を指南す　安藤右京進宅にて将軍の命に依り中村岡田淡路守と槍を合す　五五
高島左近赤井弥兵衛喧嘩の事　五五
小姓高島左近小従人赤井弥兵衛を斬る　五六
高島左近切腹に付島田幽也評判の事　五六
左近の切腹　左近の伊達　奴左近　幽也左近の人と為りを評す　五七
長曾根才市の事　五七
才市錠鎰の新工夫　才市の奮罪を蒙る　五七
柳生但馬守猿を飼ふ事　五七

猿を飼て太刀打の相手とす　猿の手練浪士を驚かす
大猷公御放鷹石谷十蔵馬士相撲の事　五八
鷹野に於て十蔵馬士関源蔵と搦闘す　十蔵将軍に賞せられ又堀田加賀守に賞せらる
星野勘左衛門和佐大八の事　五九

巻之三

富士山焼の事　六〇
宝永四年十一月　江戸町々の恐怖　狂歌　富士郡の注進
京洛火幷に禁裏炎上の事　六一
宝永五年三月　鳳輦を加茂に遷す　焼亡の町名
綱吉公薨御の事　七二
薨去の達　薨去に付ての秘説
法会及び葬儀　遺物分配　被仰出条々

巻之四

将軍宣下の事　八九
宣下に付ての儀式
家宣公の事　九六
三十三間堂の矢数　星野の通矢和佐の矢数　弓の総一
越後屋八郎右衛門成立の事　六一
六十日為替　八郎右衛門の商才
三ヶ津の店　八郎右衛門の家風　大丸の濫觴
月代の風を排せらる　間部越前守　新井白石を登庸せらる
桑名家中野村増右衛門の事　九七

増右衛門の出身及び驕奢　増右衛門一族の処刑　越中守の所巻
絵島遠島の事　六
月光院殿年寄女中絵島の不行跡
評定所裁判　狂言芝居等に関する法令

巻之五

木下清兵衛成立の事幷に堀八郎右衛門の事　一〇九
桂昌院御姉瑞光院　木下堀共に桂昌院に取立らる　おりうの方
江府新大橋の事　一一〇
桂昌院の善行　江戸新大橋の興立
越前忠直卿の事幷に岩崎大膳の事　一一一
忠直卿の悪行　大膳の剛直
孕女の難を救ふ　牡丹を切る
根津権現由来の事　一一一
甲府宰相綱重根津某を斬る　根津死して諫言す　綱重一社を立てゝ根津を祀る
甲府綱豊卿御病悩幷に間部内記の事　一一三
綱豊の病悩　内記の忠勤　義孝僧正
奥州白川騒動の事　一一三
土民の嗷訴　出頭人土岐半之丞の聚斂
常州保末村水論の事　一一四
水論の訴訟　評定所の対決
密夫非密夫論の事　一一五
妻木某密夫斬殺評定所の裁決
再吟味に付勘定吟味役杉岡弥太郎の判決
子供喧嘩解死人の事幷に大岡越前守の事　一一六
子供喧嘩解死人願に付越前守の判

決　越前守の成立その操行　二一七
見附番所供割の事
町人と足軽との喧嘩　その裁判
当代奇覧抜萃
行燈短檠　二一八
茶湯　二一八
多波粉　二一九
挾箱　二一九
木下長嘯の詠　二二〇
霊元院瘧の御製　二二〇
後水尾院御製　二二〇

巻之六

当代奇覧抜萃
細川家の香木　二二七
大和言葉　二二八
本阿弥光悦の逸事当代三筆の競争　二二八
器具の華美　二二〇
日本人明国に漂着す　二二〇
堀田正成の歌　二二一
大猷院の歌　二二二
佐賀田喜六　二二二
前野織部生駒将監に仇を報ず　二二三
伊藤宗左衛門が働き　二二三
水野勝成難船に逢ふ　二二四
女の許に文をやる法　二二四
越後石臼の火　二二四
奥州方言つぼいげ　二二五
惟喬親王の墓　二二五
惺窩五十の歌　二二六
羅山丈山を訪ふ　二二三
朝鮮少年の詩　二二三
江州今津天神西行と問答す　二二三
烏丸光広病者を労はる　二二三
泉八右衛門の人道説　二二三
黄檗山千呆和尚の言　二二三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c